

---

# 月に子に

永沢やえ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

月に 子に

### 【Nコード】

N0090BA

### 【作者名】

永沢やえ

### 【あらすじ】

インディゴは月の使者。オレットと新米コールをつれ聡明なる魂を月へと導く。輝ける魂を求めやってきた彼らは、年老いた老婆と出会い言葉をかわすことに。これは、愛するひ孫を守ろうとする曾祖母のお話し。

上（前書き）

曾祖母：九十になろうかという老婆。なにかと誤解されがちだが、面倒見はよい。

インディゴ：濃いブルーの瞳に、茶褐色の髪。まとめ役。曾祖母と会うのは今回二度目。

オレット：灰色の瞳と髪。気品ある皮肉り屋。インディゴとは長い付き合い。

コール：琥珀色の瞳に、ブロンドの巻き毛。初仕事で浮き足立っている。

リラ：曾祖母のひ孫。とても活発な女の子。

月が満ちていく。

「なんて日が悪いんだろっねえ。まったく、なんて不吉なこと」

古い家具と、色褪せた絨毯の敷かれた部屋の中で、そのしわがれた声はよく響いた。

ランタンで薄暗く照らされたこの場には、家の者たちの多くがいる。だが、その誰も彼もが、曾祖母の言葉に呼応するでもなく、ただ顔をしかめて目を向けた。

もう九十になるといふ曾祖母は、年の割にはしっかりとした体つきで、しかし、丸めた背すじのためか大変小柄に見える風貌をして、いつもとかわらない場所に腰かけている。

窓辺に置かれた古椅子におさまった彼女は、ガラス越しに上を見つめ、星がまたたきだしたばかりの夜空を一切の動きなくにらんでいた。

鬼気せまる表情と口調に、その挙動を見守っていた一同は、曾祖母がもうそれ以上話す気がないのを見てとると、それぞれがしかめっ面のまま曾祖母への興味をそらしていく。

今日のような日に、日が悪いだ。不吉だ。などと　縁起でもない。

誰もがなんて不謹慎な。と、思いはしても、それを口に出す者はいないのだ。

ひとつには、曾祖母が古いい伝えや、神がかった話を好んでするふしがあったからである。しかしなにより、この家で曾祖母に口を出せるような者はそう多くない。

この家の主人であり、絶対的な権限を有した彼女は威厳に満ちたそのたたずまいで、他者を寄せつけない雰囲気や常にとまどっていた。そんな曾祖母に気おされたように、みな何も聞かなかったようにして顔をそらすばかりだったのだ。

部屋の出入口に程近いところで、いく人かが静かな会話を交わしている。

そこで話しを終えた年若い医者は、薬品の匂いをただよわせ曾祖母のもとまで歩み寄ると、早々にいとまを告げた。そして、看護婦をともないその部屋を後にする。

医者が他にも往診の依頼をかかえている中。昨日、そして三日前にも曾祖母の強い要望から往診を願い、早馬をつかわしていた。

子どものたんなる風邪。という一同の見解から、今夜無理に往診を願った曾祖母への目は内心冷やかだ。

この医者はこれから赤ん坊をとりあげに行くのだそうだ。そんなわけもあって、医者は道すがらの寄り道といった具合で手早く往診

をすませていった。

しかしそのことが気に食わない曾祖母は、不機嫌な態度を隠すことなく、渋い顔のまま扉の先に医者が消えるのを見送ったのだ。

ここ五日間ほど寝込んだきりの曾孫に、想いをはせる曾祖母の表情はいっそう険しく、今夜のような空に相応しいとはとてもいえない。

日がとつぷりと暮れ、明るさを増してきた月明かりは千差なく、地上へ煌々と降りそそぐ。

澄んだ空気ただよう、星空の日。

月は美しい弧を描き、遙か彼方の上空で、白く、ぼんやりとした光の輪を灯して浮かんでいる。

美しい三日月である。

その家はゆるやかな丘の上に、新緑の屋根をかまえて建てられていた。カシワの葉がかかるようにのぞく、白壁の古い家は、蔭がからみ穏やかな様相をていして長い年月をそこで過ごしている。

常には楽しげな子供の笑い声が響き、訪れる人は絶えず、美味しい食べ物があり、暖かな燈が消えることを知らない。

しかし今、それらは遠い昔の忘れ去られた過去のように、見る影もなく重い静寂がたちこめている。

ただの風邪だったはずだ。四日前にはそうだと思った。

はじまりは熱と咳。誰もが子供にありがちな、よくある風邪だと思っていた。しかし状態は悪くなるばかりだ。

いつとき戻った食欲も、たいして食べることなく消えうせてしまった。

曾祖母は、言い知れない違和感におそわれていた。

そして、古い、古い記憶にせき立てられるような焦りを感じていた。

かきいだいた、肩がけのショールが不安にゆれる。

その夜は草の根にはう虫たちすら、鈴の音をぱったり止め、まるでその身を隠すように静まりかえる。

葉がしげり、ずんぐりとした木にひそむ二つの目は、音も立てずにどこかに消え去り、そして夜目のきかぬ鳥たちすら、寝床を捨ててどことも知れずあわてて飛び立つ。

家の者たちは気づいていない。

これから赤ん坊が生まれ出ようとしているさなかに、不吉だ、なと口にした理由を。

この家を去る医者に、無遠慮な態度で接した本当の意味を。

手を伸ばせば届きそうな月が、すぐそこまでせまっている。

ダイヤを砕いてまいたような明るい夜空だ。

そんな星たちにまぎれることなく、暗い影をともなう三日月が、ぼっかりと空に浮かぶ。

はつきりとした境目を描いて輝く、眉のようなその月は、本来ま  
るいものなのだと強く主張しているようであった。

そしてそれは、曾祖母の脳裏に幼い日の出来事を呼び起こす。

あれが、現実のものかどうか、すでに記憶は薄く曖昧だ。今とな  
っては信じたくもない。だが、初月から徐々に満ちていく今このと  
き、あの者たちがここを訪れるのではないかという六感がくしくも  
今夜、曾祖母の頭を満たしていた。

いつか出会うかもしれないと期待していたこの再会を、望まぬか  
たちで迎えなければならぬことに強い悲しみをいだき、年老いた  
深い皺の曾祖母は、空を見つめる。

誰もいるはずのない夜の空。そこには、楽しげなしゃべり声をの



せる者たちがいる。

彼らは、悪魔ではない。

しかし人は、それを死神とよぶ。

またある人は、天使だとも。

三日月の影から現れた三つの影は、地上に近づぐにつれ徐々にかたちをなしていった。

そしてそれは、月光に似た温かな灯し火をつよくして、ゆっくりと舞い降りていく。

「お待ちください！ インディゴ。オレット」

快活な声をあげるのは、鮮やかな黄色の粒子をまとったひとつの光だ。

その光をよく見れば、両耳に白く大きな翼を広げた、小さな頭が存在する。

それは人の言葉を解しても、人の姿をなしてはいない。産まれていくらかしたような愛らしい赤子の頭に、耳には白鳥のようなつややかな翼をはやし、ただそれだけで宙に浮く。

夜空を照らす、星とともにあるその存在は、高い上空を吹きぬける風には露ほどの干渉もつけず、ゆらめくように緑あふれる広大な大地へと向かいおりてきていた。

一番先をいく柔らかな藍色の光が、かるく後ろをふりあおぎ声をとばした。

「しつかりとついて来なさい」

すずやかで落ち着いた声が夜空に響く。

それを発するのモまた、赤子の頭だけの存在だ。

彼は濃いブルーの瞳におだやかな表情をあらわすと、軽やかに茶の毛をそよがせてふたたび先へと進みはじめた。

そんな青の輝きを追い、いそぎ足なみをそろえた光色をまとう赤子は、琥珀のようなつぶらな瞳を横へと向ける。彼は頬のえくぼが印象的だ。

「失礼しました。しかし今夜はよい夜ですね。なんて気持ちがよく、薫り高い空気でしょう」

赤子の顔が、あたりの空気を楽しむように小さな鼻を上向かせる。すると次には、気に食わないとでも言いたげな別の声だ。

彼は青い光をまとうインディゴの横から、紫の輝きをきらめかせてひよっこりと顔をのぞかせた。

銀の髪をさらりとながし、ゆるやかになめる目線は高貴ささえただよわす。しかし彼の中性的なその声には、随所に刺々しさがこめられていた。

「薫り高いも何もわかるものかな？　そなたは今夜が初の船方ではないか」

黄色い光の赤子は、その性質をあらわすような輝くブロンドの巻き毛を生真面目にふり、たたずまいを正すといっそう声を明るくして紫の光へと口を開いた。

「コールです。先ほど自己紹介させていただいたではありませんかオレット。私にもちゃんと名前をいただいたのですから、どうぞコールとお呼びください」

精一杯に刃向かうようなその鼻っ柱を、オレットは含みのある笑みで見やった。

「なんとまあ、賑やかなことだ」

そしてついで顔をそらし、翼をはためかせて少し先の空へと進む。そんな後ろ頭に、コールはむっと口をとがらせた。

オレットと呼ばれた灰色の髪の赤子は、ふせがちな灰色のまつげに隠された瞳から、あまり感情を読みとらせることをしない。しかし、その口は他に知れわたるほどに辛らつた。

コールは気持ちもあらたに、声を高めた。

「興奮もしてしまいます！ 天庭でも名高いインディゴと、待ちに待った初仕事がともにできるなど。私はなんて運がよいのでしょうか。辞令がおりたときなど、まだ飛んだこともない身だというのにまるで空に舞い上がったかのような心持ちでした。もちろんオレットだとして僕の気持ちがおわかりになるでしょうか？」

鼻歌でも歌いださんばかりに微笑んでいるコールは、器用にもそ

んなことをしゃべりながら、三人の中ではいくぶん小ぶりの翼を寄せて、二三回転してみせた。そうしてインディゴとオレットの間に割り込むと、来た道をひとり満足気に見上げる。

オレットが、そんな様子を横目に顔をひどくしかめたのは言うまでもなく、視線をそらすとつとつとつし気にちいさく息を吐くのだった。

二人のやり取りに、インディゴは困ったふうに眉を寄せる。

「まあなんだ、どんな噂話がとびかっているのか私は知りはないがね。そういった話は間に受けないことが賢明だろう」

言葉をえらぶようにして口を開くインディゴが、言い終わるが早いか、端で飛んでいたオレットはその自らの翼を優雅なしぐさで一度大きく羽ばたかせると、白銀のまざる紫の輝きをふたりの間に滑り込ませた。

いささかの強引さにもおかまいなく、オレットはすまして会話を続ける。

「まったくんだ悪評さ。このひよっ子の。いきり屋の。おしゃべり好きが。余計なことを風潮しないようにこれから監督しなければならぬなんて、うんざりするといふものだね」

あまりに辛らつな物言いにいきり立ったのはコールだ。

「ぼく、ご迷惑をおかけするようなことは致しません！ それに悪評などと、インディゴに救われ、船に進んで乗る魂たちもいるのだと私のような者の耳にまで届いてまいります。慕っている者もそれはそれは多くいるのですよ。インディゴは誰よりも優れたはたらき

をしているではありませんか！ 私もそのはたらきを見習ってインディゴのようになりたいのです。一緒に仕事をさせていただけ。この喜びでついつい口も軽くなってしまふというものです。ぼくはそんなにおしゃべりではありません！」

迫るように意気込むコールから閉口のていで逃れながら、オレットは横へと後ずさった。

そうしてインディゴへと翼を寄せると、

「人の身のような、この耳をふさぐ手がないことがこんなにも口惜しい日が来ようとは思ひもしなかったよ」と、オレットは苦々しげにつぶやくのだった。

「おまえも焼きが回ったものだな」

日頃から他者のあつかいに熟達なこの旧知の友が、珍しく感情をあらわにするものだから、インディゴは心底楽しげに喉を鳴らす。

そうしてからインディゴは、紫の光越しに、優しげなブルーの瞳をまっすぐむけた。

コールはあわててたたずまいを正すと、真摯にインディゴの挙動を目で追う。

インディゴもまたそれをつけた。

三つの光はゆっくりとだが確実に、土と魂あふれる地上へと近づいている。

視線をつけたインディゴが、ゆっくりとだが、ごく軽い調子で口を開いた。

「コール。どうかもう少し肩の力を抜いておくれ。まだまだ先は長いんだから。それと、これだけは言わせてもらいたいのだがね。なんとかな、私を見習うのはおすすめしないよ。私のやることは了見の狭いことなのもかもしれないと、常々感じているのがこの、私自身なのだから」

ふたりに挟まれ、それを聞いていたオレットは、夜の水面を泳ぐようにして身をひねり、すかさず前に進み出ると、つんとすねて言い放った。

「そうだね。そんなことに付き合っている私は大概な馬鹿者のようだ」

インディゴは目を丸くすると、すぐにくすり笑って視線を合わせる。

「オレット。私は君にとっても感謝しているよ」

優しげなお互いの様子に、あわてたのはコールだ。

「ぼ、ぼくだとて、必ずや役立ってみせます！」

その身を前へと向けたオレットに、競うように進みでてきたコールが並んだ。

オレットは横に目をやり、辛らつな物言いもどこへやらからかい半分茶化しにかかる。

「どつだかねえ。まあ、せいぜいへまをしないように私が目を離さないようにしていようじゃないか。コールも、私に感謝したまえよ」

そのいかにも面白がっている様子のオレットへ、コールは心底嫌そうな顔を向けた。

「ご遠慮致します」

距離をとろうと翼を動かすその素早やささに、オレットは滑らかな目元を動かし、細めた瞳を、明けの明星のように輝かせた。

夜空に、オレットにしては珍しい愉快そうな笑い声が響きわたる。

声を聞くのは、一匹の猫。あるいは、孤高の一輪。

翼ある彼らは、生あるものと相反する。その声を聞くのは運命の悪戯。神の采配。

日もとつぷりと暮れて、ランタンの明かりがちいさく灯る町並みを見おろしたインディゴは、今日の日の仕事をそこだと決めた。

「さあ。夜の深みもいい頃合だ。そろそろ仕事を始めよう」

やわらかな三つの光は、なだらかに下降しはじめる。





下

白いペンキがわずかにはげた扉を開く。

なるべく音をたてないように、その軽い木製の扉を手のひらに感じながら、ゆっくりと開いた。

月明かりに照らされた小さな部屋は、温かな寝息で満ちているにもかかわらず、冷たさと、静けさのようなものをこの視神経に満たす。

そこには月明かりと、闇の色だけが存在した。

リラの眠るベットに月光の光が差しこむさまを見つめながら、その細く開いた隙間をすり抜けるようにして中へと入り、曾祖母は握りしめた取っ手をひねって、わき腹の横に小さな音を力チャリとたたてた。

しん 。 と、無音が鼓膜を支配する。

この部屋は、もう六年も前にリラを迎えるために整えられ、すでに何度かの模様替えもして、今ではリラが赤ん坊だった頃の面影など残していない。

足を弱くしてからはそうそう来ることもなくなっていたその部屋

に、曾祖母はわずかな物哀しさを感じて詰まる胸を押さえた。

しかし、よくよく部屋を見渡せば、初めて見るはずのその部屋が何度も訪れた場所であるかのような、そんな既視感におそわれ目を細める。

暑い夏の日、庭で古い勉強机がきれいに直されていくのを、頬を上気させながら見つめていたリラの姿が思い出される。

完成したときには嬉々として家中をはね回り、みんなに報告して回っていた姿がこの間のことのようにだ。

部屋に並ぶ人形たちは、どれもこれもが見知った顔だし、部屋はリラの好きな色であふれている。

裁縫の苦手なリラの母が、苦勞して編んだレースのハンカチは少しよれながらも、折り目正しくたたまれて、大事そうに置かれている。

その、ハンカチの中には、つやつやと七色に輝く貝殻が隠されていることだろう。

こつそりと曾祖母にだけ見せてくれたリラの大切な宝物。

この部屋の壁紙やカーテンからさへ、元氣にかけまわるリラと、関わるすべての者たちの思い出と香りが、優しくただよっている。

曾祖母は、こつこつという杖の乾いた音をゆっくりと響かせながら、リラのもとへと歩いた。

ベットの横に置かれた足の細い椅子に腰かけ、杖を机に立てかけると、曾祖母は数日ぶりにリラの顔をよくよく眺める。

小さな頭をあお向けにして枕におさまる幼い顔は、明るい星空に照らされてもなお青白く、まるで熱を感じさせない。

十分なふくらみの羽布団から出された、両の手を見とめて、自ら

の骨張った手のひらをそつとそえた。

まだ若いその滑らかな手指は氷のように冷たく、曾祖母のわずかな体温では温めることもかなわないようだ。

小さく愛らしかった唇は乾き、色あせ、わずかばかりの温かな吐息も吐き出している。

どうしてこんなにも痛ましい様子が、ただの風邪だといえるのだろうか。

忍び寄る影とささやき声が、こんなにも聞こえてくるというのに。

こうしてリラの顔色を見ることもせず、騒がしく医者を望んだ。

それは、周りからうとまれるのも致し方ないことだと思いはするのだが、この、あまりにも無力な己に奥歯をかんだ。

十日もすれば月は満ち、丸い玉のような満月になる。

星空のまぶしい、三日月の夜。

曾祖母がずっと幼かったあの日に味わった、浮遊感と、喉の渴きと、眠りへの誘いが、リラの中に満ちているのを感じる。

誰が信じるだろうか。この身体が教えるのだ。昔味わった鋭利な空気を。奪い去るような執拗な視線を。だれが信じてくれなくとも、曾祖母は死の歩み寄る音を見ていた。

まろい光玉の輝きが、どこからか集められ、どうやって欠けてい

くのか。そんなことばかり考えていた幼かった頃を懐かしんで星を見上げた。

すると窓の向こうの夜空の中に、美しい三日月と、淡い光が三つ、浮かんでいるのが目に入った。

三色の星が、数多の星にまぎれてゆらめいている。曾祖母は思わずまぶたをゆっくりと閉じ、もう一度開いた。

吸い寄せられるように焦点を合わせ、魅入られたようにその光を見つめる。

まもなく光は必然性を有して目の前に現れた。

部屋の窓をそのままに、ガラスとサッシをすり抜けて、広くもな  
いこの部屋の空間にゆるやかな円を描いて、そこにいたった。

藍色の光の中で浮かぶ赤子の顔が、こちらに問う。

「おや、見えているのかい？」

止まった時間を取り戻すように、曾祖母は一拍の間のあと、自身に言い聞かせでもするかのようなささやき声でつぶやいた。

「あなた方には、お会いしたことがある」

「……覚えていてくれたんだね。君がまだ生まれたての新芽のような幼子の頃、私たちは出会って別れた。そして、今宵もそうなることを私は願おう」

青い光。インディゴは、ごく感情の読めない顔つきをしてそう答えた。

ちらちらと光の粒子をただよわせ、温かな青と、鮮やかな黄色と、落ち着きのある紫の輝きが円を描いて重なっては離れ、部屋の中のあらゆるものに光がめぐる。

それはまるで星の光の洪水のようだ。しかし、不思議とまぶしさは感じない。

気づくといつの間にかリラの手を握りしめていた曾祖母は、その手を優しく取りなおして真正面を見すえた。

「あなたは、とても優しい方なのです。生きたいと言った、私の願いはすっかり叶えられました。とても感謝しています」

光の赤子たちが一様にかたい表情の中、スミレに輝く灰色の髪の毛の赤子だけが、わずかに目元を動かして口を開いた。

「ほんとうによく覚えておいで」

オレットのゆるんだ表情がさめやらぬうちに、インディゴはごくゆっくりと曾祖母に語った。それはまるで、幼い子に言い聞かせるような口調だった。

「あれは、間違いであつたのだ。あのとき、君の命の炎は尽きていなかった。ほんの小さな灯火ではあつたが、確かにそこにあつたのだ。君にはふたたび、燃えうる可能性が残されていたんだよ」

「……まだ。まだ、この子の命だとて灯っています。まだ、息をして、生きようとしているではありませんか！」

これから起こる出来事を告げられた気がして、曾祖母は声が震えるのもかまわず叫んだ。

羽の生えた赤子たちには、つゆほどにも耳に届いていないのか、そんな曾祖母にこたえようとはしてくれない。

ふと目を落とした先には、生きているのか死んでいるのか。蒼白な顔から生じる悪寒を、紛らわすように、その小さな頬をしわがれた指先でそつとなでた。

深く眠ったりリラの吐息が、かろうじて呼吸していることをこの手に伝える。

さきほそる声をふるって、曾祖母は力強く顔を上げた。

「この子は、連れていかせやしません！」

「それは君が決めることではないのですよ」

端に控えていたコールが曾祖母の前へ進み出ると、切り捨てるようにそう冷たく言い放った。

しかし、曾祖母の決意は簡単に崩れはしない。

「私は、そうは思いません。この子はまだ連れていかせやしません。」

この子の母がまだここにいません。この子の父がまだここにいません。いるのが、私のようなものひとりでは、この子があまりに不憫ではありませんか。今、この小さな子を、あなた方に渡すわけにはいきません！」

年老いた彼女は、年を感じさせない力強さで三様の光に対じする。コールは思わず目を見張った。

それでもすぐにとりなおすと、黄金色に輝く赤子は曾祖母の顔へ威圧するように迫った。

「我らには関係のないことだ」

いくら年を重ねても、人であるかぎり抗うことはかなわないであろうそれらの者たちに、今日、曾祖母が屈することは許されない。そう決意していた曾祖母は、全身に受ける視線で瞳が痛むのにもかかわらず、座った椅子から滑り落ちて屈してしまいたい衝動にも耐え、顔を下げることにはしなかった。

「私が……。この私が、それでは納得がいきません」

前へ乗り出し、冷めた目を向けていたコールを、紫の光をまとったオレットが両の翼を広げてやんわりと下がらせた。

三つの光は、また、もとの距離を保ってリラと曾祖母のわずか上を浮かぶ。

インディゴが、両端にオレットとコールをたずさえて口を開いた。

「その子は決して、自分のことを不憫だとは思っていない。母に愛され。父に愛され。君に愛されて。幼子は得がたい無償の愛を十分に抱えている。幸せに包まれた彼女の何を憂うというのです」

「幸せなどと……。なぜ？ なぜそんなことが言えるのですか。寂しいはずです。心細いはずです。まだ、こんなにも小さくて、これから先、いくつも開けた未来が待っているというのに。まだ、恋もしていない。まだ、本当の愛も知らないのに。不憫にもなるではありませんか」

インディゴは底の見えない青の瞳を、まっすぐに彼女へ向けた。

「本当の愛とは何？」

右にひかえたオレットが、紫の瞳に憂いをのせて彼女へ向ける。

「この子はこの世に産まれた。歌い。笑い。あたたかに眠り。この子は母に抱かれた」

左にひかえたコールは、とろりとしたはちみつ色の瞳を彼女へ向ける。

「この子は感じる。この子は考えることができる。この子は、他者のために微笑むことができるのですよ」



そして再びインディゴが、どこまでも優しく、身に響く声色で曾祖母の視界を満たした。

「人が、人の幸福を押し量ることなどできはしない。そして、君がどんなに訴えても変わらないものが確かにある。それでも、人にもできることがあるのです。君のような人がそばにいて、手をそえる。それだけで、子は愛に満ち、愛を知る。君もわかっているはずだ。この子の身のうちには愛が満ちている。この子は我らが連れてゆきます。ですから君は、今宵のことを忘れなさい」

その言葉には力が宿り、決意をしめあげ、縮んだ肺を苦しめた。それでも曾祖母は潤む目を見開き、しゃべるのをやめない。口が乾き、至極しゃべりづらい口を賢明に動かし訴えつつけた。

「しかし、しかしこの生まれ育った場所を。父と母と、離れてしまうには、あまりにもこの子は幼いではありませんか……」

「彼女が寂しくないように、我らが離れずにおりましょう。決して迷い子にならぬよう、決して寒くはならないように。我らが寄りそい、白銀の船へと導くと、ここに約束いたしましょう」

「何としても、この子を連れていくとおっしゃるのですか」

「連れてゆきます」

三人の赤子は、その身をついにリラへと向けた。

そこではなめらかな光が細く力強く放たれはじめ、新たな光が生

まれでようとしている。まるでこの世の生气すべてが、この小さな身体から抜けでるように。

取り残されようとしているリラの身体を目の前にして、ぶつぶつとした恐怖が足元からかけ上り曾祖母は寒さに震えた。

思うようにならない足も忘れて、曾祖母は腰を浮かせ、賢明にリラを守るうと覆いかぶさる。

「待ってください!」

「退きなさい」

「退きません! この、この老いた魂を先に連れていくのが筋ではないですか! どうか。リラのかわりに、この子のかわりに私を連れてください」

「君の命はまだ残されている。それを君が望もうと、望むまいと」

「この命が、まだ少しでも残されているの言うのなら! 私の命をこの子にあげます! あなたにはそれができるのでしょっ?」

しほりだすように叫ぶ曾祖母の声はひどくかすれた。

リラを守るようにしたまま、深い青の瞳をまんじりと見つめ、いつかしたときのようにインディゴに願う。

その視線をうけたインディゴは、一体何を想っているのだろう。曾祖母には分からない。

しかし、曾祖母は彼を信じた。

「……君に残された時間は短い。それは、子が大人になりきるまでの時間には、あまりにも足りない命だ」

「インディゴ！」

驚きをかくさず止めに入るコールを目の前にして、曾祖母は意をくみ取れることもできず青と黄色の光を目で追った。そこへオレットが割って入る。

「口をはさむな、コール」

「しかし、それでは……」

コールは眉をひそめながらも、オレットの鋭い静止にその身をふわりと下がらせた。

納得いかなげなコールを尻目に、曾祖母はさした一条の光をたくり寄せる想いで、インディゴのその言葉にすがりついた。

「インディゴ。あなたは、インディゴというのですね。幼い日、まだ生きたかった私を見逃してくれたあなたは、またふたたび、私の

願いを叶えてくださいますね？」

「君が、それを願うのならば」

頑なで崩すことのしなかったインディゴの表情がゆるんだ気がして、曾祖母は重い空気を吐き出して息をついた。

横では、けわしい顔のコールがなにか言いたそうな様子で身構えている。それをさえぎるようにして、今度はオレットが曾祖母の前へと進みでてきた。

憂いを含んだまつ毛の下で、磨かれたアメシストの瞳が輝きをみせて曾祖母を見つめる。

「いずれこの子が再び我らの迎えをうけるとき。魂が今宵のような聡明さを損なっていたともなれば、その業をうけるのは彼だ。私は、それを許さない。君は彼女の魂が賢くあり続けると、保証できるといえるのかい？」

「もちろん。保証いたしますとも」

曾祖母の返答は、少しもゆるぎはしなかった。

満足のゆく答えを得られた様子のオレットは、楽しみに喉を鳴らすとインディゴの横へとふたたび並んだ。そしてあらためて曾祖母へ目を向ける。

「その言葉を信じ、聡明なる魂の願いを叶えよう」

インディゴは、最後に言った。

「我らは今宵。君の魂を白銀の船へといざなおう。そして、残された時間を彼女に」

夜風をうけるはずもないのに、コールはひやりとする空気を感じて柔らかな羽をわずかに閉じた。

空はかわらず幾千もの星が散らばり、暗い夜空に光を灯す。

コールは珍しく気弱な様子でおずおずと言葉をもらした。

「……よかったですか？」

澄ました顔のオレットが狡猾な笑みで口の端を上げた。

「ずいぶんと元気がないじゃないか。さっきまでの威勢はどこへいった」

「からかうのはよして下さい！ あれがどういふことかといふこと

くらい、僕にだってわかっていきます!」

そこへ止めに入ったのはインディゴだ。

「あまり大きな声を出さないでくれるか。彼女が起きてしまう」

インディゴが翼で抱え込むようにしているそこには、小さな光がゆらゆらと浮かんでいる。オレットは身を寄せてその光をのぞき込んだ。

「疲れて眠ってしまったようだね」

「あの子供。目覚めたらひどく悲しみますよ」

コールはそう言うと、わずかに後ろを振り返り、先ほどまでいた若草色の屋根が小さくなっていくのを目で追った。

その年にしてはしっかりとした体つきで、しかし、丸めた背筋のためか大変小柄に見える老婆の身体。それはいま、眠るようにして深く椅子にもたれている。

金色の髪を、風になびかせるかのようにしてふるったコールは、地上を眺める視線を戻すと、インディゴと、オレットの横に並んで月を見すえた。

コールの強いまなざしにオレットは呆れ顔だ。

「この子があの子の魂を保証したではないか」

「それが何だというのです! そんな、不確かな。あの子ひとりの業がどれほどのものか。もし損なわれるようなことがあれば、罰を受けるのはインディゴなのですよ。オレットはそれでもよいと言う

のですか！」

「それはよろしくない。よろしくないが、言ったところで私にインディゴを止めることはできないからね」

「勘弁してくれオレット。コールも、私はこういつたことをするかから見習うなといったんだ。もし船の灯りが弱まれば、もちろん天庭に知られることにもなるだろう。だが、君に責任はない。このことで迷惑をかけはしないから、心配するな」

「僕は、インディゴの身を心配しているのです！」

激しく憤るコールに、しっ！と、オレットが黙るよう制した。

コールは一度、オレットに顔をしかめながらも、声を落としてインディゴへ問いかける。

「確かに、これほどの輝きを船へ導くことができたのは大変よろしかったと言えましょう。ですがあの子は、この子の行いを知りようがありません。あの子がこれから、どのような生を生きるかもわからない。なのに……、これはずいぶんと大きな賭けではありませんか？」

そこに割って入ったのはオレットだ。彼は幼い顎を上げて自慢気に答える。

「賭とはまた、言い得て妙だね。私は負けるとわかっている賭けはしない主義なんだ」

「では勝つとおっしゃる」

「どうだかね」

からかうように言うオレットに、コールは嫌味のコもった視線を飛ばし、両者はしばしにらみ合った。

暖かく小さな光を、インディゴが見つめる。

「あの子は受けた恵みに応えるだろう。そしてきっと、今宵つけた恩恵を忘れない。この子があの子を信じたように。我らもまた、信じるのだよ」

優しげなささやき声は、夜空に輝き光って溶けた。

彼女は信じた。

彼らは信じた。

そうして聡明なる魂が運ばれ、月は満ち、輝いていく。

リラは明日、美しい月をみることだろう。

月に光を　子に愛を　輝きの魂　満ちる月





## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0090ba/>

---

月に子に

2011年12月31日03時50分発行